

人と未来を

みつめるあなたへ

Message



近年の医療は飛躍的な進歩を遂げています。これらの多くは基礎的研究を基盤とした成果であり、研究なくして医療の発展は望めないことは明白です。医師には、最先端の医学知識を的確に患者に伝えることが求められますが、膨大な医療情報の中から正しい情報を見極める能力が不可欠であり、そのために科学的思考力が必須となります。そして科学的思考力は、実際に研究に従事する中でこそ、真に醸成されるものです。

一方、近年、日本の研究力の低下が深刻な課題となっており、その克服には博士課程における専門領域の研究活動が今まで以上に重要となっています。AI・IoT・ビッグデータなどの最先端技術を駆使して豊かな社会をつくる未来構想であるSociety 5.0が、内閣府により提唱されています。名古屋市立大学は、Society 5.0の実現を目標の1つとして、2024年度からの6年間に達成すべき目標をまとめた第四期中期計画が始動しています。その中で「先端的な研究の推進」「研究力強化」「産学官金連携によるイノベーションの創出」が重要な目標となっています。医学研究科では、これらの目標達成に向け、基礎医学と臨床医学講座間および研究科間の医療系連携、さらには産学連携を積極的に推進し、先端機器や最新テクノロジーを最大限に活用できる研究環境の整備に力を注いでいます。

「医学はまず経験科学であり、次いで実験科学である」これは近代実験医学の父と称されるクロード・ベルナル博士がその著書「実験医学序説」のなかで述べている言葉です。革新的な医療シーズを生み出すためには、日々の臨床経験に学び、さらに仮説と実験を重ねて科学的真理に迫る不断の探究心が欠かせません。研究は決して平坦な道ではありませんが、挑戦の先に得られる新たな発見と感動は、何ものにも代えがたい貴重なものです。

ぜひ、名古屋市立大学医学研究科での研究を通じて、この喜びを分かち合い、未来の医療をともに切り拓きましょう。

名古屋市立大学 大学院医学研究科長 片岡洋望

History

- | | |
|-----------|---|
| 1943年 4月 | 名古屋市立女子高等医学専門学校開校 |
| 1948年 4月 | 名古屋女子医科大学開学 |
| 1949年 10月 | 名古屋市議会において名古屋女子医科大学と名古屋薬科大学を統合して、名古屋市立大学とする決議案 |
| 1950年 4月 | 名古屋市立大学設置(旧制医学部入学定員40名) |
| 1951年 3月 | 名古屋市立女子高等医学専門学校閉校 |
| 1952年 4月 | 新制医学部医学科設置(入学定員40名) |
| 1955年 4月 | 医学部進学課程設置に伴い、同課程および薬学部一般教育系列の教育を行う教養部を設置 |
| 1958年 9月 | 医学部を田辺通キャンパスから川澄キャンパスに移転 |
| 1959年 5月 | 旧制医学研究科に学位論文審査権附与 |
| 1960年 11月 | 医学部図書館を附属病院内から川澄キャンパスへ移転 |
| 1961年 3月 | 旧制医学部および同研究科廃止 |
| 1961年 4月 | 大学院医学研究科(博士課程)設置 |
| 1963年 4月 | 医学部医学科入学定員を60名に増員 |
| 1966年 11月 | 附属病院を改築、新病院(川澄キャンパス)にて診療開始 |
| 1975年 4月 | 医学部医学科入学定員を80名に増員 |
| 1975年 9月 | 医学部図書館・講堂完成 |
| 1977年 6月 | 基礎教育棟完成 |
| 1981年 5月 | 附属病院増築工事完成 |
| 1987年 4月 | 医学部分子医学研究所発足 |
| 1992年 12月 | 医学研究科実験動物研究教育センター完成 |
| 1996年 3月 | 医学研究科・医学部研究棟完成 |
| 2000年 4月 | 医学研究科の専攻を再編し、入学定員を27名から52名に増員 |
| 2002年 4月 | 大学院部局化 |
| 2004年 1月 | 附属病院の病棟・中央診療棟が稼働開始 |
| 2006年 4月 | 名古屋市立大学の独立行政法人化 |
| 2007年 5月 | 附属病院の外来診療棟が稼働開始 |
| 2008年 4月 | 医学研究科修士課程(入学定員10名)を設置 |
| 2009年 4月 | 医学部の入学定員を92名に増員 |
| 2010年 4月 | 医学部の入学定員を95名に増員 |
| 2012年 5月 | 附属病院の東棟(喜谷記念がん治療センター)稼働開始 |
| 2014年 8月 | 医療デザイン研究センターを設置 |
| 2014年 11月 | 不育症研究センターを設置 |
| 2015年 4月 | 医学部の入学定員を97名に増員 |
| 2015年 10月 | 医学研究科・医学部未来プランを策定 |
| 2017年 1月 | 先端医療技術イノベーションセンターを設置 |
| 2017年 4月 | 修士課程に臨床医療デザイン学分野を設置 |
| 2019年 10月 | 脳神経科学研究所を開設 |
| 2021年 4月 | 東部医療センター・西部医療センターを名古屋市立大学医学部附属病院として新たに運営開始 |
| 2023年 4月 | みどり市民病院、みらい光生病院を名古屋市立大学医学部附属病院として新たに運営開始
医学研究科博士課程の入学定員を52名から100名に増員 |
| 2024年 4月 | 医学研究科修士課程に診療看護師コース(入学定員10名)を設置 |
| 2025年 4月 | リハビリテーション病院を名古屋市立大学医学部附属病院として新たに運営開始 |

アドミッション・ポリシー Admission Policy

名古屋市立大学は、「全ての市民が誇りに思う・愛着の持てる大学をめざす」ことを大学の基本的理念として掲げ、大学院教育では、大学院生への研究指導は研究活動の活性化の一環であるとの認識に基づき、高度な専門性と学際的視点を備えた研究者及び職業人を育成することを目標としている。

本大学院では、これらの理念や目標のもとに、基本的な専門知識と技術を持ち、高度な専門性と国内外で活躍する意欲と適性を備えた、多様な能力や経歴を有する人材を広く求めている。

博 士 課 程

教育研究上の目的

- 高度な専門教育および研究指導により、医学研究および医学教育を担う人材を育成する。
- 人類の未来に貢献する医学研究を行い、その成果を社会に還元する。
- 名古屋都市圏の中核医療機関として、地域住民の健康と福祉を増進する。

人材養成に関する目的

博士課程では、独創的な研究を行う最先端の医学研究者、先端的な医療知識・技術を有した臨床医、さらにはそれらの知識・技術に基づき、医学教育を担い得る人材の養成を目的とする。

求める学生像

- 将来の医学研究をリードする国際的医学研究者を志す人
- 高度最先端医療を創出し、実施する医療人を志す人

修 士 課 程

教育研究上の目的

- 高度な専門教育および学際的な研究指導を行い、医科学の専門知識を有する研究者および技術者を育成する。
- 人類の未来に貢献する医学研究を行い、その成果を社会に還元する。
- 名古屋都市圏の中核医療機関として、地域住民の健康と福祉を増進する。

人材養成に関する目的

修士課程では、高度な専門教育を行い、医科学の専門知識を有する職業人と将来の博士課程進学を含む研究者の養成を目的とする。

求める学生像

- 最先端の医学・医療及び生命科学に強い関心をもつ人
- 先駆的かつ独創的な研究者或いは高度専門技術者を志す人
- 自然科学の基礎分野における十分な学力を有するとともに、自ら学習や研究に主体的・自律的に取り組む意欲を持つ人

修 士 課 程（診療看護師コース）

教育研究上の目的

- 高度な専門教育および課題研究の指導を行い、医科学の専門知識を有する研究者および技術者を育成する。
- 人類の未来に貢献する研究を行い、その成果を社会に還元する。
- 名古屋都市圏の中核医療機関として、地域住民の健康と福祉を増進する。

人材養成に関する目的

修士課程（診療看護師コース）では、医学の専門知識を有し、診療とケアを統合した高度実践看護を実践することができる診療看護師（NP）を育成することを目的とする。

求める学生像

- 看護職としての高い資質と倫理観を持ち、患者・家族の立場での思考ができる人
- 看護実践の科学的な根拠を探究し、自己研鑽しつづける意志をもつ人
- 協調性と自律性を持ち、チーム医療において多職種と協働できるコミュニケーション能力をもつ人
- 文化や価値観などの多様性を理解する人
- 診療看護師（NP）として、クリティカルケア領域における看護の発展を目指す志をもつ人
- 大学院での学修の成果を医療現場に還元し、医療の質向上に貢献できる人

修得しておくべき知識の内容・水準

欧文論文読解と作成のための英語能力に加えて、医学・医科生命科学 研究遂行に必要な理系大学学部、あるいは大学院修士課程修了レベルの生命科学・基礎医学知識を有すること。または高度最先端医療の実践を目指しうる基礎的医療技術と知識・経験を有すること。

概要

医学研究科博士課程は、基礎医学、臨床医学の枠を超えた横断的な生体機能・構造医学、生体情報・機能制御医学、生体防御・総合医学、予防・社会医学の4専攻から構成されています。基礎医学研究者と臨床研究者とが自由に最先端の医学研究を共同で実施できる体制を組織して大学院生の教育にあたり、独創的かつ応用範囲の広い医学研究者及び高度の医療知識と技量を備えた医師を養成することを目的としています。脳神経科学研究所は、認知症科学、腫瘍・神経生物学、神経発達症遺伝学、神経毒性学、神経発達・再生医学、認知機能病態学の6部門で構成され、高度な研究を行っています。

修得しておくべき知識の内容・水準

自然科学諸分野の大学教養レベルの知識を取得していることに加え、生命科学または関連する分野における専門基礎知識を身につけていること。欧文論文読解に必要な英語能力を有していること。

概要

医学研究科修士課程は、高度な専門教育を行うことにより医科学の専門知識を有する職業人と博士課程進学を目指す研究者を養成します。入学者は医療系学部に限らずサイエンスにかかわる多分野にわたる学部の卒業生であり、疾病の原因解明、その治療法や予防策の探索、健康の推進などに関する研究に意欲的に取り組んでいます。

修得しておくべき知識の内容・水準

- 看護学をより深く学ぶために必要な専門知識及び看護師としての実践的知識
- 共感的、援助的コミュニケーション能力
- 研究に関する基礎的知識
- 論文作成に必要な基礎的語学力

概要

診療看護師には、「熟練した看護実践能力」「看護管理能力」といった看護学教育を基盤とした能力に加えて、「包括的な健康アセスメント能力」「医療的処置マネジメント」「病態の理解」といった医学教育による能力が期待されます。本コースにおいては、医学分野における教育・研究を強化し、医学研究科、看護学研究科及び5つの附属病院が一体となって、より質の高いクリティカルケア領域の診療看護師を養成します。

カリキュラム Curriculum

博士課程

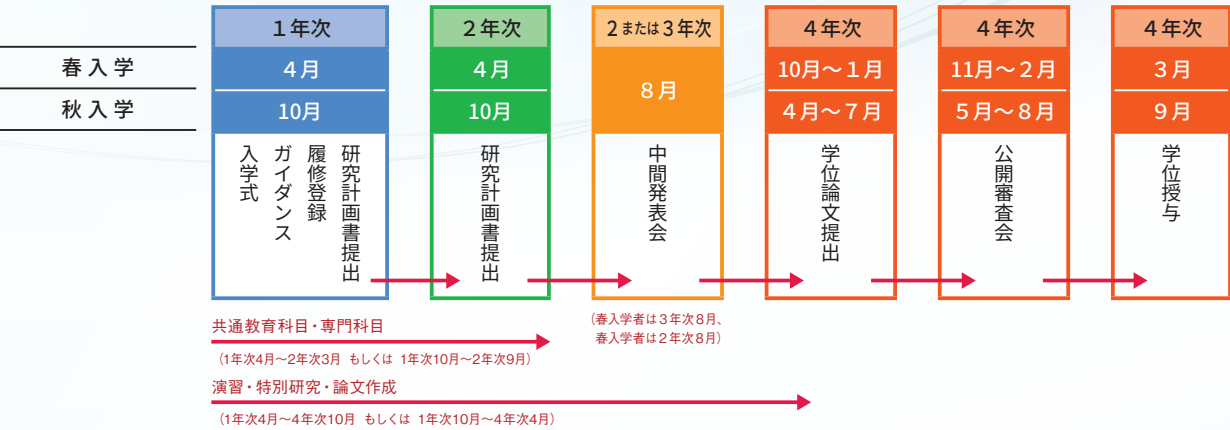
医学研究科博士課程は、生体機能・構造医学、生体情報・機能制御医学、生体防御・総合医学、予防・社会医学の4専攻により構成され、各専攻とも次の科目群により教育を実施しています。

共通科目：医学の研究や実践を遂行する上で、各専攻の枠を越え、共通して必要と考えられる基礎的知識・技術の習得、さらには、最先端医学・医療の知識を習得する。

専門科目：専門分野の知識・技術を習得し、大学院学生としての専門性を獲得するとともに、博士論文の立案、作成時に基盤となる知識・技術を習得する。

特別研究：教員の指導のもと特定の研究テーマを設定し、共通科目、専門科目で習得した知識・技術を応用し、博士論文を作成する。

なお、平成16年より夜間開講や夏期集中講義など社会人も受講可能な教育カリキュラムを設定し、広く人材を受け入れています。



修士課程

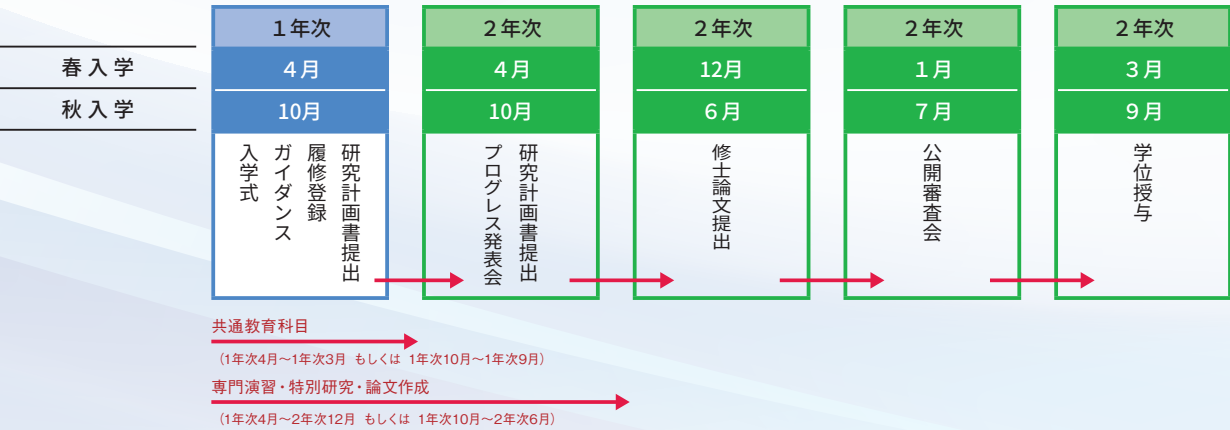
医学研究科修士課程では、共通教育科目、専門演習および特別研究により大学院教育を行っています。

共通教育科目：最先端の医科学・医療および生命科学分野の幅広い知識の修得を目指す。

専門演習：特別研究の遂行に必要な実験の方法論・手技に関する知識および文献検索手法の修得を目指す。

特別研究：専門分野の研究プロジェクトに参画し研究能力の修得と専門性の強化を目指す。

昼間および夜間での講義開講、夏期集中講義により社会人も受講可能な教育プログラムになっています。さらに、英語による講義も充実しています。



修士課程（診療看護師コース）

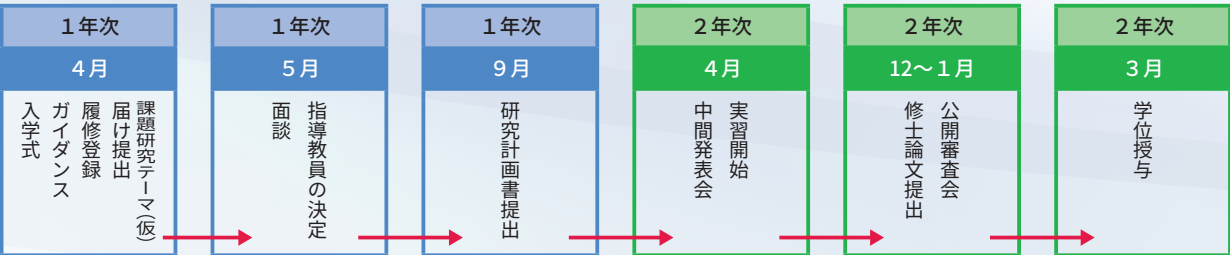
医学研究科修士課程（診療看護師コース）では、専門科目の講義・演習・実習および課題研究により、診療看護師の養成を行っています。

講義：医学研究科および看護学研究科の専門講義により、専門性が高く、幅広い知識の修得を目指す。

演習：講義とシミュレーションを組み合わせ、基礎的知識と技術の修得を目指す。

実習：5つの附属病院を中心に、多様な臨床場面における判断力と実践力を養う。

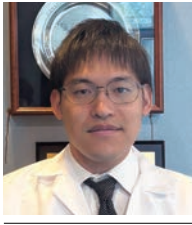
課題研究：医学的視点と看護学的視点から考える臨床上の疑問・課題に対し、研究的アプローチを用いて、臨床実践に寄与する論文を作成する。



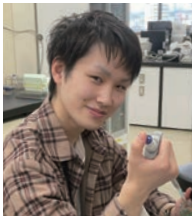
専 門 分 野 名 担 当 教 員 名	研 究 内 容
統合解剖学 植木 孝俊教授	(1)脳機能発現と脳神経疾患の病態の調節に代謝系、免疫系があずかる分子基盤を、ニューロン・グリア相関や粘膜免疫系に着目しながら、機械学習などのAIを併用し探究する。(2)ヒトと動物で脳イメージング技術を駆使し、リハビリテーションによる治療的介入を至適化するための治療標的と予後マーカーを探索するとともに、それを分子標的とする先端リハビリテーション技術の研究開発を行う。
機能組織学 鵜川 真也教授	感覚器と脳の両方面でシームレスな研究を展開 (1)聴覚・味覚受容に関する遺伝子の同定と遺伝子改変動物を用いた機能解析 (2)成体脳海馬の新生神経に関する形態学的・分子生物学的・生理学的研究
分子腫瘍学 田口 歩教授	プロテオミクスを起点とする多層オミクス解析を武器に、分子レベルでがんの本質を解き明かし、その克服を目指しています。 (1)プロテオーム解析手法の革新と次世代プロテオミクスの創成、(2)がん早期診断と治療個別化に資する血液バイオマーカーの開発 (3)網羅的分子プロファイリングによるがんの分子機構解明と分子標的治療の開発
細胞生化学 加藤 洋一教授	纖毛は細胞外に突出したアンテナ状の細胞小器官で、様々な疾患との関わりが知られている。我々の研究室では以下の研究テーマに焦点を当てている。(1)纖毛形成の制御機序の解明、(2)纖毛によるシグナル伝達の制御機序の解明、(3)纖毛病の病態機序の解明、(4)様々な疾患における纖毛の役割の解明(悪性腫瘍、不育症など)
細胞生理学 橋谷 光教授	平滑筋およびその周辺細胞に関する機能的、形態学的研究 (1)平滑筋自発活動の発生伝播機構、(2)平滑筋機能の神経性、液性制御機構、(3)内臓組織における微小血管の機能特性 主要実験方法：電気生理学的手法、細胞内カルシウムイメージング法および蛍光免疫染色法
脳神経生理学 飛田 秀樹教授	神経科学 & 神経生理学的手法を駆使し、病態生理学的な視点のアプローチから3つのプロジェクトの研究を実施し、脳神経系の生理機能の解明にアプローチしています。 (1)リハビリテーションによる脳内出血後の前肢運動機能の回復メカニズムの解析、(2)新生仔白質損傷モデルへの幹細胞(ES細胞/iPS細胞)移植による機能回復のメカニズム解析、(3)うま味摂取により起動する腸-脳相関による情動形成メカニズムの解析
消化器外科学 瀧口 修司教授	臨床応用を目的とした消化器癌の増殖、浸潤、転移、血管新生に関する分子生物学的メカニズムの解明。癌と炎症、栄養治療による炎症反応の修飾機構の解明。内視鏡手術の手術術式の開発。癌の免疫・化学療法。周術期外科感染症。
呼吸器・小児外科学 奥田 勝裕教授	肺癌や胸腺上皮性腫瘍などの胸部悪性腫瘍に対する外科的・分子標的治療に関する研究。特に、胸部悪性腫瘍に対する低侵襲手術の臨床的および科学的有用性に焦点を当てた研究。
腎・泌尿器科学 安井 孝周教授	尿路結石の分子機構の解明、内視鏡外科、前立腺がんの病態と骨転移機構、がん選択的温熱療法、男子不妊症の病態究明と補助生殖技術、宇宙医学(特に尿路結石と生殖)、泌尿器科手術術式の開発、泌尿器分子生物学、先天性疾患の発生機序、小児泌尿器科学、遺伝子診断法・治療法の開発、排尿メカニズムの解明、泌尿器疾患のエピゲノム制御、ロボット工学、VR技術
心臓血管外科学 (未定)	
乳腺外科学 遠山 竜也教授	(1)乳癌のホルモン依存性増殖機構の解明に関する研究、(2)ホルモン療法効果予測因子に関する研究、(3)トリプルネガティブ乳癌に関する研究、(4)乳癌の予後予測因子に関する研究
小児泌尿器科学 (未定)	
視覚科学 安川 力教授	網膜硝子体疾患の病態解明の基礎研究、画像機器による診断・治療に関する臨床研究、AIの活用に関する研究 (1)加齢黄斑変性の病態解明(脂質代謝メカニズム・マクロファージ・肥満細胞の役割の解析)、(2)眼科ドラッグデリバリーシステム(DDS)(眼内薬物徐放システム)の開発、(3)細胞シートを用いた再生医療、(4)マルチモーダルイメージングによる網膜静脈閉塞症の病態解析、(5)ナビゲーションシステムを使った糖尿病黄斑浮腫の局所レーザー治療、(6)眼科領域におけるAI支援画像機器の開発及びデータモニタリングシステムの開発
耳鼻咽喉・頭頸部外科学 岩崎 真一教授	(1)ウイルスに起因する急性聴平衡障害の包括的病態解明と新規治療への応用、(2)全脳機能解析に基づく両側前庭障害の重症化のメカニズム解明と新規治療への応用、(3)ウイルス性顔面神経麻痺のモデル動物を用いた顔面神経麻痺の分子機構の解明、(4)めまい・平衡障害に対するノイズ前庭電気刺激を利用した新規治療、前庭リハビリテーションの開発、(5)頭頸部がんの免疫機構の解明と腫瘍溶解ウイルスによる新規治療の開発、(6)発声障害の新たな客観的評価法の開発、痙攣性発声障害の病態解明と新たな手術治療の開発
加齢・環境皮膚科学 森田 明理教授	難治性皮膚疾患に対する光線療法 の機序解析と開発、樹状細胞によるアレルギー疾患・自己免疫疾患・悪性腫瘍の治療、環境因子(タバコと紫外線)による皮膚老化の機序解析、皮膚免疫制御による末梢性トレランスの誘導
口腔外科学 渋谷 恭之教授	顎骨再生に関する基礎的・臨床的研究、口腔前癌病変の治療に関する基礎的・臨床的研究、インプラントによる治療法の開発、顎骨再建と口腔機能回復に関する基礎的・臨床的研究、口腔ケアに関する研究
形成外科学 鳥山 和宏教授	創傷治癒遅延とその救済、脂肪幹細胞による軟部組織再建、リンパ浮腫とリンパ管再生
実験病態病理学 高橋 智教授	前立腺癌化学予防に関する実験病理学的研究、前立腺癌、乳癌、婦人科腫瘍、消化器疾患の発育・進展に関わる臨床病理学的解析、ギャップ結合タンパクから見た実験的肝発がん研究、健康食品を含む環境物質の発癌修飾作用およびその分子生物学的機構解明に関する研究、ヒト疾患モデル動物を用いた実験的腫瘍病理
臨床病態病理学 (未定)	(未定)

専 門 分 野 名 担 当 教 員 名	研 究 内 容
薬理学 大矢 進教授	イオンチャネルを免疫・炎症疾患、癌、骨疾患、循環器疾患の創薬標的分子として捉え、次のような研究を行っている。(1)免疫系・炎症性疾患における免疫細胞の機能変動とイオンチャネル活性・発現制御、(2)がん悪性化・がん免疫とイオンチャネル活性・発現制御、(3)骨関連疾患とイオンチャネル活性・発現制御、(4)心臓のメカノトランスダクションにおけるイオンチャネル活性制御、(5)イオンチャネル作用薬の開発
細菌学 長谷川 忠男教授	A群レンサ球菌などの病原細菌の感染症発症のメカニズム、細菌毒素蛋白質の機能・発現機構の解析、重症細菌感染症に対する新たな治療法の開発
免疫学 山崎 小百合教授	樹状細胞、制御性T細胞を利用した免疫制御の研究と様々な病態の基盤解明・治療開発
ウイルス学 奥野 友介教授	(1)Epstein-Barrウイルス(EBV)関連がんの遺伝子解析と治療法開発、(2)慢性活動性EBウイルス感染症の原因解明 (3)新型コロナウイルス感染症の治療法開発、(4)希少疾患(小児がん、遺伝性造血不全症候群等)の原因解明と治療法開発
病態モデル医学 大石 久史教授	ゲノム編集技術による遺伝子改変動物の作製と表現型解析を通じて、(1)細胞膜タンパクの再利用経路が個体の初期発生や分化に与える影響を明らかにする。(2)生殖加齢に伴うホルモンやエピゲノムの変化を明らかにして、妊よう率の向上を目指す。ことに興味を持って研究を進めています。
整形外科学 村上 英樹教授	(1)腰部脊柱管狭窄症における黄色靱帯の変性メカニズム、(2)高悪性軟部腫瘍に対する温熱放射線化学療法、(3)小児股関節疾患の病態、(4)人工神経による末梢神経の再生、(5)前十字靱帯(ACL)不全膝、並びにACL再建膝の動態、(6)関節リウマチ(RA)発症機序、(7)RAの薬物療法や手術療法による治療効果、(8)肩肘投球障害に関する基礎および臨床研究、(9)外傷性骨軟骨欠損に対する再生医療、(10)大脳髄質壊死の病態解明とそれに基づく治療法の開発
リハビリテーション医学 植木 美乃教授	(1)非侵襲的計測法を用いた運動・認知機能評価、ニューロリハビリテーションの開発、(2)股関節症術後の装着型サイボグを用いた新規リハビリテーションシステムの開発、(3)パーキンソン病関連疾患におけるclosed loop stimultaionを用いた新規歩行リハビリテーション法の開発、(4)AIを用いたリハビリテーション効果の予測・最適化、(5)神経難病のリハビリテーション現状における全国調査
精神・認知・行動医学 明智 龍男教授	気分障害・不安障害・心的外傷後ストレス障害・摂食障害・がん患者の認知行動療法・対人関係療法・デジタル技術を用いた治療開発研究。気分障害・統合失調症の家族介入/家族心理教育開発研究。発達障害・不登校児童・家族のQOL向上および介入方法の開発研究。難治性うつ病の治療最適化研究mECT,TMSなど)。周産期を含めたコンサルテーションリエンゾン精神医学・精神腫瘍学・緩和医療学・てんかん学・学生メンタルヘルス・地域精神保健領域の研究も実施。
精神腫瘍学(連携大学院) 藤森 麻衣子教授	がん患者・市民参画による支持・緩和・心のケア開発、がんサバイバーや進行がん患者のケアプランに関する研究、共感的コミュニケーション研究、心理師・看護師・医師協働ケアに関する研究、小児・AYA世代、高齢者のQOLと総合機能評価に関する研究、がん患者の家族・遺族支援に関する研究、がん医療に従事する医療スタッフの教育システムの開発研究、デジタルメンタルヘルスの実装科学研究、ビッグデータを用いたがん対策研究など
脳神経外科学 間瀬 光人教授	虚血性脳血管障害の外科、脳損傷修復の分子機構、クモ膜下出血、水頭症、頭蓋内圧亢進の病態に関する分子生物学的研究、頭蓋底外科、定位脳手術、脳血管内手術の新技术開発、パーキンソン病に対する外科療法の開発、びまん性脳損傷の病態解析と治療法の開発、幹細胞移植による神経機能回復法の開発、手術支援画像技術の開発、新しい機能的脳外科手術の開発導入
産科婦人科学 杉浦 真弓教授	不育症病態解明、着床前診断、出生前診断胎児治療、周産期医学、生殖免疫、生殖補助技術、生殖器腫瘍発生機序、遺伝カウンセリング、エコロジー&チルドレンバースコホート研究
新生児・小児医学 齋藤 伸治教授	新生児中枢神経障害の成因解明と新しい治療法の開発、新しい新生児呼吸循環管理法、小児内分泌疾患の診断と治療、先天性心疾患の包括的管理、小児悪性腫瘍の診断と治療、小児肝疾患の発症機構、小児神経疾患の原因と病態解明、ゲノム医学を用いた小児疾患の病態解明、再生医療の小児医療への応用、発達障害の評価と介入方法の開発
認知症科学 齊藤 貴志教授	認知症・アルツハイマー病および脳卒中の病態形成の分子機構の解明と予防・治療法の開発を目指して、病態モデルマウスを用いた生化学的・病理的・行動学的・薬理学的手法を中心に研究を展開している。特に、神経・グリア連関、脳-末梢連関および疾患連関に着目した細胞病態・分子機構の解明
腫瘍・神経生物学 川内 大輔教授	小児および成人の脳腫瘍の発生と進行の機序を解明し、それに基づいて新たな治療標的分子を同定することを目標とする。特に、ヒトの疾患を反映した自然発症する脳腫瘍マウスモデルの開発に注力しており、神経発生学、腫瘍生物学、および情報生物学を融合させた独自の視点から新たながんシグナルの解明に取り組んでいる。また、ヒト患者由来の腫瘍を移植したモデルを用いた薬理学的実験を通じて、基礎研究と臨床研究の架け橋となる研究を、欧米との国際的な共同研究を交えて推進する。
神経発達症遺伝学 山川 和弘教授	神経発達障害には、遺伝子の異常の寄与が大きいことが今までの研究によって明らかにされ、多くの原因遺伝子が同定されてきています。我々のグループでは、発達障害や知的障害、更にはそれに合併するてんかんの発症に関わる複数の原因遺伝子の同定、更にはモデル動物の作成や、それを用いた発症機序の解明を進めてきました。現在、これらの知見に基づき、遺伝子治療法を含め、全く新規で真に有効な治療法の開発を目指し、日々研究を進めています。
神経毒性学 酒々井 真澄教授	(1)リスクアセスメント:ナノサイズ粒子の神経系や肺に与える毒性評価(細胞-個体レベル)と機序解析(サイトカイン、がん関連遺伝子)、(2)ドラッグディスカバリー:毒性軽減を目指した抗がん物質の分子設計およびインシリコ標的分子解析、構造活性相関(QSAR)、機序解析(転写因子、血管新生)、天然医薬品資源学、(3)エクソソームを介した細胞間相互作用の探索、(4)脳内シグナルペプチドの機能解析、(5)動物モデル:ヒトへの外挿モデルとしての発がん動物試験開発と有用性評価
神経発達・再生医学 澤本 和延教授	中枢神経系の発生・再生のメカニズム解明と再生医療への応用をめざして、成体脳における神経幹細胞の増殖・分化と新生神経細胞の移動・成熟機構を中心に、齶歯類と霊長類、正常動物と疾患モデルを比較しながら研究する
認知機能病態学(寄附講座) 野村 洋教授	記憶・学習や情動の神経メカニズムの解明。特にin vivo神経活動の測定や操作、神経回路の選択的な可視化による脳神経ネットワークの解析。記憶や情動の破綻が関わる神経疾患、精神疾患の病態解明、新規治療法・予防法の開発。(注)寄附講座は、設置期間に期限があります。
消化器・代謝内科学 片岡 洋望教授	(1)消化器癌の新規診断、治療マーカーの探索、(2)消化管癌に対する光線力学診断法、治療法の開発、(3)炎症性腸疾患の新規薬物療法の開発、(4)IgG4関連疾患や自己免疫性膵炎に対する新規診断-治療法の開発、(5)悪性胆道や消化管狭窄に対する金属ステント治療法の確立と力学的観点を含む集学的検討、(6)非アルコール性脂肪肝炎治療法の開発、(7)肝発癌抑制のための治療法の開発、(8)ウイルス肝炎におけるウイルス・ヒトゲノム解析、(9)糖尿病・脂質異常症・肥満症・内分泌疾患の病因病態の解明と新規治療標的分子の探索

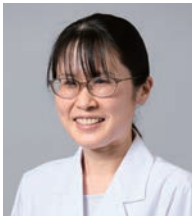
専 門 分 野 名 担 当 教 員 名	研 究 内 容
呼吸器・免疫アレルギー内科学 (未定)	
循環器内科学 ※ 瀬尾 由広 教授	(1)心不全に対する個別化診断および治療戦略の開発に関する研究、(2)循環機能を評価するための先進的な心エコーおよび画像診断技術の開発、(3)構造的心疾患における病態生理の解明と治療の最適化に関する研究、(4)虚血性心疾患の新たな評価と理解に向けた標的としての冠微小循環の研究、(5)高血圧の予防および管理における生活習慣および環境要因の影響に関する研究
腎臓内科 ※ 濱野 高行 教授	(1)慢性腎臓病に伴う合併症、特に腎性貧血、骨ミネラル代謝異常に関する研究、(2)腎臓のサイズに着目した糖尿病性腎臓病とうっ血腎の研究、(3)急性腎障害に関する研究、(4)心腎連関の病態解明に関する研究
神経内科学 松川 則之 教授	(1)臨床神経学、(2)パーキンソン病関連疾患の臨床、(3)アルツハイマー病を中心とした認知症の臨床、(4)病態生理に基づいた神経疾患画像バイオマーカーの探索、(5)神経ペプチドから見たアルツハイマー病病態解明、(6)新規アルツハイマー病モデル動物を用いた治療薬開発の基盤研究
血液・腫瘍内科学 ※ 飯田 真介 教授	(1)造血器腫瘍を中心とした癌の分子病態解析、新規治療標的分子の同定、分子標的薬の効果と毒性を予測するバイオマーカー研究、薬剤耐性化機序の解明とその克服に関する研究、(2)抗体療法やキメラ抗原受容体導入T細胞(CAR-T)療法を中心とする新たながん免疫療法の開発研究、(3)がん薬物療法の臨床試験、臨床治験の計画・実施によるエビデンスの創出
麻酔科学・集中治療医学 ※ 祖父江 和哉 教授	周術期の神経認知機能障害の機序解明、敗血症による中枢神経障害の発症機序解明と治療法の開発、慢性疼痛発症機序の解明と治療法の開発、口腔領域の慢性疼痛の機序解明と治療法の開発、重症患者に対する栄養管理に関する基礎的研究、麻酔・集中治療領域の臨床研究
放射線医学 樋渡 昭雄 教授	(1)種々の画像診断機器を駆使した先端的画像診断研究、(2)人工知能を応用した放射線医療の構築、(3)新たな画像下治療(Interventional radiology: IVR)法の開発、(4)陽子線治療を含む放射線治療の最適化と治療成績向上、(5)放射線生物学に基づく放射線生物学の探求
総合診療医学・総合内科学 ※ 宮崎 景 教授	下記のトピックに関する量的および質的研究(1)総合診療医/総合内科医の養成(カリキュラム開発、ビデオレビュー、多職種連携等)、(2)ACP(人生会議)の推進、(3)医療面接の有用性(SP養成等)、(4)SDH(健康の社会的決定要因)(COVID-19、在日外国人の医療アクセス等)、(5)健康の新しい概念(positive health)の構築、(6)希少疾患(SCLS)に関する全国調査、診断、治療法の開発、(7)コミュニティヘルスケアセンターを活用した地域参加型研究(フレイル予防等)
臨床薬剤学 ※ 日比 陽子 教授	(1)抗がん剤治療を行う患者の副作用発現リスクの解析。(2)抗菌薬の血中濃度測定結果に基づく投与シミュレーションソフトの有効性評価。(3)泌尿器・腎臓疾患と薬物の関連についての解析と新規治療法の開発。(4)せん妄など脳機能障害と腎臓疾患の関連についての解析。(5)その他、薬物治療上の問題点をシーズとした臨床研究。
先進急性期医療学 ※ 笹野 寛 教授 服部 友紀 教授	(笹野寛教授)呼吸・循環連携(心拍・血流変動解析、呼吸性動性不整脈の生理)、臨床デバイスの開発(超音波ガイド下穿刺法、酸素投与法)、末梢静脈挿入型中心静脈カテーテル、医学シミュレーション教育(服部友紀教授)静脈血ガスと乳酸値の研究、敗血症病態と血管内皮由来過分極因子(EDHF)の研究、フレイルと救急医療についての研究、COVID-19による肺障害の研究、COVID-19の後遺症の研究
救命救急医療学 ※ 松嶋 麻子 教授	高齢化社会における敗血症に関する臨床研究、院内感染予防と対策に関する臨床研究 重症外傷および救急搬送に関する臨床研究 減災・医療に関する研究、救急医療とヘルスケアアートに関する研究
感染症学 伊東 直哉 教授	(1)病院および地域の抗菌薬適正使用支援に関する研究、(2)感染症コンサルテーションが患者アウトカムに与える研究、(3)免疫不全患者におけるCOVID-19研究、(4)薬剤耐性菌の臨床研究、(5)帰国後患者の感染症の疫学研究
環境労働衛生学 ※ 上島 通浩 教授	(1)環境化学物質のリスク評価(健康影響・作用機序・曝露量の解明)に関する研究 (2)小児環境保健疫学研究
公衆衛生学 ※ 鈴木 貞夫 教授	がんやメタボリックシンドロームなどの生活習慣病・健康・QOL・総死亡などに関連する要因(生活習慣、生育歴、心理社会的要因、遺伝子多型など、要因間の交互作用も含む)の種々の疫学研究による探索と評価、診断・検査法の評価と比較、臨床疫学、難病の記述疫学
法医学 ※ 大島 徹 教授	被虐待児の眼所見に関する研究、死後生化学検査を用いた法病理学的研究、体内の細胞外小胞解析による死因究明、ヒト細胞を用いた薬毒物の毒性発現機序の解明、ミトコンドリア遺伝子を用いた人類遺伝学的検討、ヒト感染ウイルスを用いた分子進化学的検討とその法医学的応用、法医真菌学、法医画像診断
医学・医療教育学 ※ 高桑 修 教授	多施設参加型教育システムの開発、効果的なFaculty developmentの開発、新しい多職種連携教育の開発と有効性の評価
次世代医療開発学 ※ (未定)	
医療統計学・データサイエンス ※ 吉村 健一 教授	医療分野における統計手法の新規開発、生物統計学的方法論の研究、統計学の広く応用分野としてのデータサイエンス研究(データ管理方法論からデータ収集計画および統計解析・解釈までの範囲の研究等)、及びその応用分野としての臨床研究/臨床試験の計画・実施に関連した種々の方法論に関する研究



博士課程3年
整形外科学分野
大野 智也



博士課程3年
認知科学分野
上西 涼平



博士課程1年
消化器・代謝内科学分野
小田 佳世子



修士課程2年
ウイルス学分野
成瀬 有純



修士課程2年
診療看護師コース
畠 千恵

グローバルな視点で医療の進歩に貢献する。

私は整形外科医として、スポーツや関節を中心とした運動器疾患の診療・研究に携わってきました。臨床の現場で患者さんと向き合う中で、「より確かな診断や予測ができれば、治療成績をさらに向上できるのではないか」と感じるようになり、その問いを追求すべく、卒後10年目に大学院へ進学しました。

大学院では、肩・肘関節の解剖やバイオメカニクスに関する研究に取り組み、基礎と臨床を橋渡しする視点の重要性を学びました。現在はアメリカ・ピッツバーグ大学に留学し、現地の整形外科研修医(レジデント)を対象に肩関節エコーの使い方について講義を行うほか、ロボットを用いた関節バイオメカニクスの研究や、人工知能によるエコー画像解析の医療応用にも取り組んでいます。多様な専門家と議論を交わす日々は、視野を大きく広げてくれています。

今後は、高精度な診断支援技術や手術評価指標の開発を通じて、世界中の整形外科医に役立つ仕組みづくりを目指したいと思っています。大学院進学と留学経験を通じ、医療の進歩に少しでも貢献できればと考えています。

高校時代からの興味をもとに、より専門性の高い研究を継続する。

高校生の頃にアルツハイマー病(AD)の存在を知り、その後大学生においてもADに強い関心を保っていたため卒業研究ではAD研究を行いました。しかしながら、所属した研究室はAD以外にも慢性骨髄性白血病などの様々な疾患を対象に研究する研究室であったため、ADを専門とした研究室ではありませんでした。そのため専門的かつ日本のAD研究をリードするような研究室で研究をしたいと熱望した結果、その分野の第一人者、特にADモデルマウスの開発に関して世界レベルの研究をされてきた方が主宰する研究室に修士課程より入ることができました。

修士課程からはADにおける神経炎症に着目しており、少しずつではありますが実験データを出すことで、研究会への参加や学会発表などを経験しました。その際、実際にAD患者を診察されている臨床医の先生からお話を伺うことで、自身の研究がどのように人へと応用できるのかという視点を強く抱くようになり、そのような観点からより自身の研究テーマを進めたいと考え博士課程に進学しました。未だ研究者として至らない点が多いですが、今後はより精進することでAD研究の発展に寄与できるような人材になりたいと思います。

育児との両立を図りながら、初めての基礎研究に取り組む。

私は臨床研修修了後、消化器内科医として勤務しておりましたが、出産・育児により数年間、臨床現場を離れておりました。復帰後は大学病院の肝・脾内科に所属し、専門性の高い環境の中で診療に携わるうちに、日々の臨床で生じる疑問をより深く掘り下げ、体系的に整理・検証したいという思いが強まりました。そうした中で、卒後12年目というやや遅いタイミングではありましたが、大学院への進学を決意いたしました。

現在は、胆汁や膵液を用いた新たな診断アプローチの開発をテーマに基礎研究に取り組んでいます。初めての基礎研究ということもあり、専門的な手技や解析手法、実験計画の立案などに戸惑うことも多く、一から学び直すことの連続です。それでも、指導教員の丁寧なご指導と研究室の協力体制に支えられ、育児との両立を図りつつ充実した時間を過ごしています。

大学院で培った知見や視点を将来的に臨床現場に還元できるよう、今後も一層努力を重ね、研鑽を積んでまいりたいと考えております。

臨床検査技師として働きながら進学し、研究を医療現場へ還元する。

私は市中病院の研究所に臨床検査技師として在籍しておりますが、医学の進歩に直接的な社会貢献をしたいと思い、医学研究科に進学することを決意しました。勤務先では臨床検体を中心に様々な遺伝子検査業務に従事しております。その中でもゲノムDNAのメチル化現象に興味を持ち、人間の健康と疾患とどのように関係するのかを学びました。

ウイルス学研究室での生活は、視野を広げ、深い知識を得る機会を提供してくれます。特に、書籍から得られる理論だけでなく、研究室で見聞きする実際の問題解決の推移は多くの知識や刺激的な経験が提供されます。さらに、先端研究や研究者たちと交流する機会もあり、このことは私の将来において貴重な経験になると確信しております。

現在、私はEpstein-Barrウイルス関連胃がんの遺伝子解析について研究を進めていますが、自身の研究成果が医療現場で活用され、役立つものとなり、社会貢献へ繋がるよう日々研鑽に励みたいと思います。

医学と看護学の両視点から研鑽を積み、診療看護師を目指す。

日本では2010年から診療看護師が臨床現場で活躍するようになり、少しずつ社会の認知度が高まってきています。本学に診療看護師コースが開設され、1期生として入学できたことを嬉しく思います。

私は名市大看護学部を卒業し、看護師としてしばらく病院で勤務した後に大学院に進みました。高度な知識や技術を身に付けて、患者さんに迅速に対応したいと思ったことと、医療現場で生じる倫理的問題に関することや他職種との連携方法などを系統的に学びたいと思ったことが、進学を志した理由です。大学院では、医学研究科と看護学研究科の両方の講義を受け、それぞれの視点から患者さんをとらえる力を養っています。先生と学生の距離も近く、理論や根拠に基づいた知見をじっくり学ぶことができます。研究も初心者のレベルから学べるため、意欲的に取り組むことができます。

名市大はアクセスがよく附属病院も多いため、整った環境の中で学びを深めることができます。向上心の高い同級生とともに、勉強に集中できる今の時期を大切にしたいです。医学的知識を持った看護師という立場で、診療看護師だからこそできることを模索し学修を進め、将来は社会に貢献できる人材になりたいです。

医学部附属病院



医学部附属病院は、昭和6年に設置された名古屋市民病院に始まり、その後幾多の変遷を経て、昭和25年に今日の名古屋市立大学病院となりました。平成7年7月には特定機能病院として承認されており、教育研究機関であるとともに、高度で先進的な医療

を提供することで名古屋都市圏の医療に貢献しています。また、令和3年4月より東部・西部医療センターが、令和5年4月よりみどり市民病院、みらい光生病院が、令和6年4月よりリハビリテーション病院が医学部附属病院となり、6病院合計で約2300床の病床を有する国公立大学で全学最大規模の大学病院群として、人材育成と臨床研究の充実を図っています。さらに、令和8年には高齢化進展に伴う市内の救急搬送の増加、南海トラフ地震などの災害発生時の災害医療活動、救急科専門医不足に対する人材育成に対するため、さらなる機能拡充を図ることを目的とした新棟「救急災害医療センター」が開棟予定です。

動物研究教育センター



実験動物研究教育センターは、微生物学的かつ遺伝学的に統御された実験動物を厳密な条件下で飼育管理し、各研究者が安全で再現性の高い動物実験を実施できる研究環境を提供しています。そのために、実験者の入退室や温湿度、照明等を

厳密に管理し、胚の凍結保存や微生物清浄化、遺伝子組換えマウスの作製などの支援を行っています。学内の動物実験委員会による動物の倫理や福祉に関する教育訓練、また学外から最新の情報を入手し、関連法規や種々のガイドラインを遵守し、適正な動物実験を推進する役割を有しています。

医学研究科 RI 研究施設



医学研究科RI研究施設（アイントープ研究室）は、教育・研究のための放射性同位元素（Radioisotope; RI）を有効かつ安全に使用するための共同利用施設です。現在、12核種（3H、14C、32P、33P、35S、42K、45Ca、51Cr、57Co、

58Co、86Rb、及び125I（全て非密封RI）の使用許可を有し、利用者の研究に資しております。施設では、放射線管理システムにより放射線モニタリング、放射線源の管理、利用者の入退室管理、放射線業務従事者の被ばく管理等を行なうとともに、放射線業務従事者向けの法規等で定める教育訓練も実施しています。さらに令和7年4月からは、全学RIセンターとしての側面も加わり、広く研究科等の垣根を超えた共同利用を推進しています。

脳神経科学研究所



脳神経科学研究所は、先進的かつニーズの高い研究課題の解決に向けた基礎医学研究をはじめとする学際的かつ融合的な研究促進のため、昭和62年開設の分子医学研究所を改組し令和元年10月に設置した施設です。

腫瘍・神経生物学分野、神経毒性学分野、神経発達・再生医学分野、認知症科学分野、認知機能病態学分野及び神経発達症遺伝学分野の6部門で、脳の機能解明ならびに認知症や発達障害など脳神経疾患の克服を目指した最先端の研究を推進します。

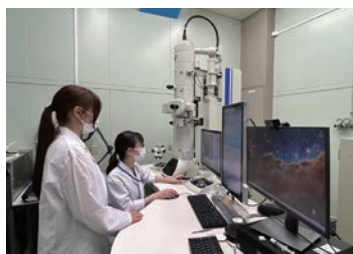
不育症研究センター



不育症、先天異常、出生前診断の領域において、地域だけでなく全国から多くの患者が集まり、臨床研究を活発に行っています。平成27年4月には文部科学省「共同利用・共同研究拠点」に認定され、本学のみならず国内外において不育症

を中心としたヒト生殖のメカニズム解明に大きく寄与していきます。

医学研究科共同教育研究センター



医学研究科共同研究教育センターは、分析部門、形態部門及びバイオバンクから構成されています。分析部門では、低分子代謝物からタンパク質まで対応可能な質量分析装置、細胞解析用のフローサイトメーター、遺伝子解析用のリアルタイム

PCR 装置などを備え、生化学的・分子生物学的な解析を支援しています。また形態部門では、電子顕微鏡や共焦点レーザー顕微鏡などの顕微鏡類を中心に、細胞・組織等の形態学的な解析を行える装置を備えています。さらにバイオバンクでは、附属病院から提出された特定の疾患の臨床検体を保管・管理することで、検体を希望する外部研究者に対しても、有償提供できる仕組みを備えています。本センターは、各部門が協力し、本学及び近隣大学の研究力強化にむけて、必要とされている技術、装置等を提供しています。

次世代のがんプロフェッショナル養成プラン

名古屋市立大学医学研究科では令和5年度より、名古屋大学を代表校とし、東海3県に医学部を置く全6大学を含む7大学の連携により実施する『東海がん専門医療人材養成プラン』（文部科学省事業）に参画し、がん医療の新たなニーズや、急速ながん医療の高度化に対応できる医療人材育成に取り組んでいます。

「がん医療の現場で顕在化している課題に対応する人材」「がん予防の促進を行う人材」「新たな治療法を開発できる人材」の育成を目的に、本プランに参画する全7大学の共有講義（令和6年度実績59講義）の提供や、また、ほかの共通教育科目にはない実習の実施を行っています。

本プランの修了要件を満たすことで、がんプロ修了証明書が授与されます。



東海3県7大学連携がん専門医療人材教育プロジェクト
東海がん専門医療人材養成プラン

がんプロウェブサイト：
<https://www.tokaigannpro.com/>



イノベーション創出に資する次世代研究者挑戦的研究プログラム (SPRING)

本学では、国立研究開発法人科学技術振興機構による「次世代研究者挑戦的研究プログラム」の一環として、「イノベーション創出に資する次世代研究者エンパワメントプログラム (SPRING)」を実施しています。

このプログラムは、博士後期・博士課程の学生による挑戦的・融合的な研究を支援し、優秀な博士人材が多様なキャリアで活躍できるよう、研究力を高めることを目的としています。参加する大学院生は、研究奨励費（生活費）および研究費の支援を受けながら研究に専念できさらに研究力向上につながるさまざまな「コンテンツ」に参加することもできます。

これらのコンテンツは、本学8学部7研究科の教員による多彩なアイデアに基づき、国内外の大学や企業とも連携して設計された、学位取得後のキャリアにもつながる実践的な内容となっています。

支援内容

- ① 支援期間：最大4年間
- ② 研究奨励費：160,000円（月額） 研究費：500,000円（年額）
- ③ キャリア開発・エンパワメントプログラムへの参加

SPRING ウェブサイト：
<https://ncu-spring.com/>



奨学金について Scholarships

田中亮 学生奨励賞 奨学金

名誉教授 田中亮先生からのご寄付を基金として創設された基礎研究者を支援する奨学金です。博士課程への進学を目指す成績優秀な修士課程学生に授与されます。

選考 ■ 本学医学研究科修士課程に在籍する2年生で、同博士課程への進学の意志を持つ学生を対象に、前年の研究進捗状況を審査して選考します。

金額 ■ 年額 30 万円（1回のみ）

明石修三 学生奨学金

名誉教授 明石修三先生からのご寄付を基金として創設され、修士課程修了後に世界をリードする学術研究者となるべく、高い意欲と向上心を持って博士課程へ進学した学生に授与されます。

選考 ■ 本学医学研究科修士課程から同博士課程に進学した学生（修士課程修了後1年以内に入学した学生を含む）に対し、原則2名以内を大学院教務委員会で選考します。

金額 ■ 授業料1年分相当額

川久保 学生奨学金

川久保巳代子様からのご寄付を基金として医学研究者の人材育成を目的に創設されました。MD-PhD コースに所属し、基礎研究に専念する学生に授与されます。

選考 ■ 基礎系分野を専門科目（主科目）として専攻する MD-PhD コース博士課程の学生を対象に、原則2名以内を大学院教務委員会で選考します。

金額 ■ 大学院入学金および授業料3年分相当額

※ MD-PhD コースとは…医学研究を志向する医学部学生に対し、早期に研究の機会を与えることによって、若手医学研究者を養成することを目的とするものです。

減災・医療コース 奨学金

減災・医療分野で活躍する人材の育成を目的とし、救命救急士、看護師、理学療法士等の国家試験を有する医療関係者、消防士、企業・自治体・学校の災害担当者で、実務経験を持つもので、キャリアアップを目指す修士学生を対象に授与されます。

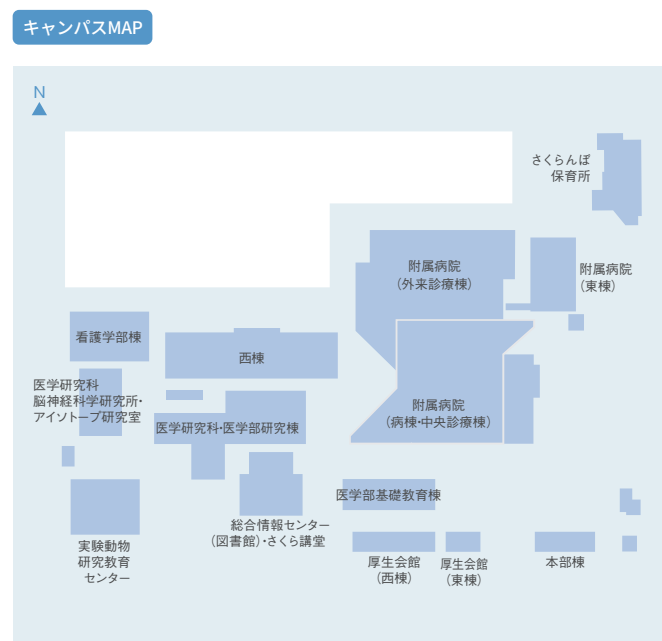
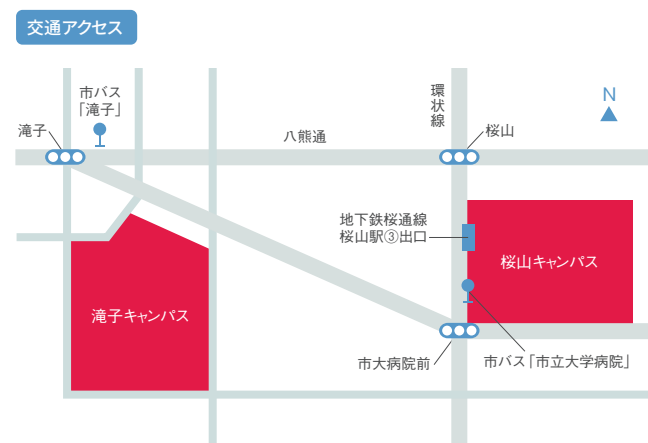
選考 ■ 減災・医療コースを履修する学生を対象に、1年次、2年次それぞれに面接や研究進捗状況などで審査し、1学年2名を選考します。

金額 ■ 年額 60 万円、最大2年間給付

2025年は 開学75周年



〒467-8601 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1 TEL.052-853-8545
医学部・医学研究科オリジナルウェブサイト <https://www.nagoya-cu.ac.jp/med/>



令和7年度 入学試験スケジュール

博士課程 (定員：100名)	1 回目	2 回目	修士課程 (定員：10名)	推薦特別選抜	一般入試	
					1 回目	2 回目
個別資格審査期間	6月	11月	個別資格審査期間	5月	6月	11月
出願期間	7月	11～12月	出願期間	6月	7月	11～12月
入試日	8月	1月	入試日	6月	8月	1月
合格発表	9月	2月	合格発表	7月	9月	2月

※1 回目入試は、4 月入学・10 月入学試験を同時に行います。
※1 回目入試で入学定員を満たした場合、2 回目は実施しないこともあります。(診療看護師コースは 4 月入学のみです。)

詳しくは、名古屋市立大学ウェブサイト「大学院入試情報」
(<http://www.nagoya-cu.ac.jp/admissions/graduate/med/index.html>) をご確認ください。



発行：2025年7月

人と未来を みつめる

2025 NAGOYA CITY UNIVERSITY Graduate School of Medical Sciences

あなたへ

名古屋市立大学 大学院医学研究科

